

人権講演会に参加して

氷上中学校 三年 堀内 心音

私は夏休みに、母に誘われ人権講演会に参加した。テーマは「感染症と人権」だった。ひとつの映画の上映と、その原作者がその映画を通して伝えたかったことを話されるという内容だった。その映画は「あん」といって、どら焼き屋の雇われ店長と、一人の老女との交流を描いた映画だった。どら焼き屋の求人募集の張り紙を見て、働きたいと懇願した一人の老女が、店長から粒あん作りを任せられる。老女が丁寧に作る粒あんは、とても美味しく、みるみるうちにお店は繁盛していった。ある日、その老女は元ハンセン病患者であるという噂が広まり、どら焼きは急に売れなくなってしまう。老女は状況を理解し、自らお店を辞めていった。店長はあとで泣いていた。その場面に、私も急にせつなくなった。ハンセン病に対する世間の偏見や差別と、傷ついたであろう老女に対し店長一人では何もしてあげることができなかった悔しさや、雇われ店長となった店長の人生がどこか重なる部分があったからだと思う。

私は、この映画で初めてハンセン病という病気を知った。ハンセン病は、治療薬のない時代に不治の病といわれ、病気にかかると、家族と引き離され、強制的に療養所で隔離されなければならなかった。それだけでなく、結婚して子どもを産むことも許されなかったり、亡くなっても故郷のお墓には埋葬してもらえなかったという悲しい話だった。それは遠い昔の話ではなく、私が生まれるたった十二年前の事実だと知ってびっくりした。そして、今も病気への誤った認識で、元ハンセン病患者やその家族への差別や偏見が残っているということだった。あとから私が住んでいる兵庫県には、四十一人の方が今も療養所で暮らされていることを知った。

もし、私が老女と同じハンセン病患者だったらと考える。小さい頃に家族と引き離され、垣根の外にはもう一生出ることにはできない生活を強いられたとしたら、悲しくて、生きる意味をなくし、絶望的な気持ちになったのではないかなと思う。

映画の中で、中学生の女の子がハンセン病患者について図書館で勉強する場面がある。ハンセン病患者が書いた本に、「私たちも陽のあたる社会で生きたい」という言葉がでてきて、とても印象に残った。あの老女も、どら焼き屋であんを作り、お店を手伝っている姿が、無邪気で嬉しそうな姿として描かれていた。垣根の外で、ひとつの願いが叶うことはすごく嬉しいことだったのだと思う。老女は木々のざわめきやそよ風など、自然の声に耳を傾け、いろんなことを想像することは日常だったのだと思う。

講演会で原作者が一番伝えたかったことは、老女が最後に話した「私たちは、この世を見るために、聞くために、生まれてきた。だとすれば、何かになれなくても、私たちには、生きる意味があるのよ。」という言葉だった。例えば、若者にどのように生きたいかを問うと、大抵の人が「社会の役にたちたい」といい、「そうでなければ生きている意味がない」という人もいるということだった。原作者はそれは言い換えれば、「社会の役に立たないと、生きている意味はない」というふうに聞こえてしまう危険性があると言われた。人は何かになれなくても、生きているだけで意味がある。生きている意味がない人なんていないということだった。みんなはこの世界をみるため、聞くために生まれてきたということを教えてもらった。

私はこの先、社会の役に立っていないから、生きている意味がないと言われたら、とても、苦しく、悲しくなってしまう。この世界を見るために、聞くために生まれてきたと思うと、生きているのが楽しく感じる。

人権は、「すべての人々が生命と自由を確保し、それぞれの幸福を追求する権利」であるといわれる意味が少しわかった気がした。

ふと、私は、ハンセン病は少しコロナと似ていると思った。最初の頃によくわからない原因のコロナウイルスは、感染すると亡くなる方がいて、みんなは怖い病気だと思っていた。コロナに関する偏見や差別がニュースで取り上げられ、実際に身近に感じることもあり、感染よりも世間を怖く感じた。

原作者は最後に、「人は一人では生きてはいけない。いろんな人とのかかわりや縁があって感謝しながら生きている」と言われた。人とかかわる中で、相手を感じる気持ちは大事なことだと思う。偏見や差別に対しては、店長と同じで、私一人では世の中を変えることはできないかもしれない。けれど、こうして人権講演会に参加し、同じ気持ちの人が増えれば世の中が変わり、みんながもっと幸せに生きていける社会につながるのだと思う。私はこれからももっといろんなことを見て、聞いて、生まれてきた世界を楽しみたいと思う。